

---

# 空 くう

紅炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空くう

### 【Zコード】

Z2075D

### 【作者名】

紅炎

### 【あらすじ】

いたつて普通の中学生生活を送る少年、真田祐樹。祐樹は中一の一年期を無事に終え、これから楽しい夏休みになるはずが、ある事が美術の作品を未だに仕上げられずにいた。そのため、夏休みなのに毎朝毎朝学校に来てその続きをすることに。そしてある日、いつものように美術室に入った時、そこには一人の少女がいた。これは、祐樹の夏の日々を描いた物語。

## プロローグ

空。それは何処までも永遠と続き、空が見えない場所なんて、宇宙以外絶対に無い。

そんな、途方も無い次元のモノである空を、俺はじつと眺めていた。

「はあ……」

小さいため息一つ。あいにくその音は、とある公式を叫ぶ数学の教師の声でかき消された。

「一次関数の式、 $y = a x + b$ は……」

中学生で習うであろうその公式を、大事だぞ。覚えておけ、と何度も生徒に呼び掛ける。そこまで言わなくとも覚えられる、という様な表情を浮かべ、うんざりする生徒も後を絶たない。教室には教師の叫ぶ声だけが反響していた。

夏と言われたら、何を連想する？

そう言われれば、皆何を想像するだろうか。

海と叫ぶ奴もいれば、スイカと叫ぶ奴も。はたまたビーチバレーと言つ奴。かき氷食いたい、などと自分の欲をぶつける奴。ビキニのお姉さん、などと意見が一致するいやらしさ丸出しの男共。

まあ、夏と言われたら大抵皆そういう事を言うだろう。逆にそんなもの以外を連想するのはおかしいのかも知れない。

そして俺は、そのおかしな奴の一人なのかもしれない。いや。確実にその一人なのだろう。

俺が夏と言られて連想するもの。それは。

ボスン！

そんな軽快な音がすると同時に、俺の後頭部に軽い衝撃が走る。当たった感じからすると、柔らかい材質なんだろうが、それでも十分痛かった。

「な、何だよ。このやろ……！」

反抗的な言葉を叫びながら、俺は衝撃の来た後ろを振り返る。するとそこには、奴がいた。あの巨漢が凄まじき威圧感を放つて、そこにいた。俺は思わず目を見開き、声を漏らしてしまう。ハゲ丸出しの筋肉オヤジが、そこにいた。

「……おい真田あ。ワシの力説を聞かずに、お前は何を考えてやがった」

真田。俺の名を呼んで巨漢　数学の教師の益田は俺を睨む。凄まじき威圧感の上に、そいつの眼力が加わった。鋭いそれは俺をじっと見つめる。目を逸らそうと何度も試みるが、奴の眼力はそれすらも封じ込めた。もう、化け物としか言いようがない。

「り、力説ですか……？」

力説。ああ、さっきの公式説明の事か。確かに一次関数の公式だけ。俺が考え事してるのが分かつて、怒鳴りにきたつて訳ですか。先生、それはご苦労な事で。

俺は思わず敬礼をしそうになる。何とかしてこの場を切り抜けたかったが、そう簡単なものではなかった。数学の教師である益田は、生徒達から一番恐れられる存在だ。周りの生徒は、ただ静かに俺のこの状況を見守っていた。

「オウよ。真田、てめえ一次関数の奥深さが分かつちゃいねえ。一次関数っていうのはだなあ……」

「また始まったよ」

ぼそつ、と俺は本音を口にしてしまった。しまった！　この状況はやばい。自分の口を慌てて手で覆い隠すものの、既にそれは遅かった。

焦つて周囲を見回してみると、他の生徒が全員俺の方を見て呆れた目で。または哀れむ目で見てている。はたまた、ノートに大きく「ドンマイ」などと書いている奴も居やがる。この俺の状況を、思いつきり楽しんでいやがる。

そんな時、俺は身に迫る危険を察知し、俺を見下ろす益田を見た。

「……貴様。貴様という奴は……！」

益田の頬は見る見るうちに赤く染まってゆく。益田は怒りに満ちた表情で俺を見る。今にも血管が浮び上がつてしまそうな凶太い腕に、凄まじいほど力が籠っている。

ああ、先生。何故そんなに顔を赤くなさるのですか？ 可愛い生徒の戯言ですよ。これくらい大目に見てやつてはどうでしょうか？ 僕は心中で益田に問い合わせるが、答えなど帰つて来るはず無かつた。

貴様、と教師に相応しくない言葉を発しながら、自分の持つていたチョークをへし折つた。爽快感溢れるその音が、逆に俺の恐怖心を刺激する。一瞬で俺の心も体も冷え切つた。

「ええと……先生。随分と爽快感ある音で。さすが益田……」

「グラウンド百周して来やがれ！ この大馬鹿野郎がああー！」  
俺の苦し紛れは儂く、一瞬で振り払われてしまった。

その後、俺の悲鳴が教室内に大きく響き渡つたのは、言つまでもなかつた。

「は、はあ。……も、もう駄目……」

誰も居ない夕暮れのグラウンドに、俺の荒い吐息だけがあつた。

通常ならば部活をしているであろうこの時間。あいにく明日はテストで、今日の部活は何処も休みのよう。

よつて、今この学校のグラウンドで一人寂しく走つていたのだ。

……ちゃんと百周な。

「つたく。益田の野郎、酷いつたらねえ」

俺は益田の愚痴を何度も零す。ハゲ丸出しの癖に俺に注意しまわ  
りやがつて。大体何だよー一次関数の奥深さって。そんなもん生徒に  
語なんくたつていいんだよ。

何度言つてもスッキリしないこの気持ち。愚痴つても愚痴つても  
意味のない事に、やつと気が付いた俺は、愚痴を零すのをやめた。

そして、俺はゆっくりと後ろに倒れる。そして仰向けにグラウン  
ドの真ん中で寝そべつた。背中には汗がべつとりとつき、服が張り  
付いたくらいだから、恐らくグラウンドの土が思いつきり付着した  
だろう。

しかしそんな事お構い無しに、俺は大の字になつて寝る。すると  
夕暮れの涼しい風が頬をなで、俺の体を冷涼する。

「 そういうや。もう、秋なんだよなあ……」

俺は小さくそう呟いた。秋がすぐそこまで来ているのは目に見え  
ていて、大分日が沈むのも早くなつてきていた。夏なら七時ぐらい  
まで普通に出来る部活も、最近では六時半でも大分暗くなり、大分  
やりづらい状況になつてきていた。

それに木の葉も大分紅く色付き、もうそろそろ紅葉の時期なのだ  
ろう。

「 夏が終わつて……あの子が居なくなつて、もうそんなに経つのか  
涼しい風が俺の体を冷やしてくれる。夏だったあの頃では考えら  
れない事だ。あの時、暑かつたらアイス食つたりして凌いでたつけ。  
……あの子も一緒に。

懐かしい夏季の光景の数々が、俺の頭には鮮明に広がつてい  
た。

## プロローグ（後書き）

初めまして、紅炎です。  
恋愛系の小説を執筆するのは、殆ど初めてですが、頑張りますのでよろしくお願ひします。

## 第一話

丁度今から二ヶ月前。その頃は立派な夏真っ盛りで、太陽の紫外線は厳しく、女性は肌の事で悩んでいた事であろう。その光景が簡単に想像できる。

そして毎日のように、外では蝉が騒がしく鳴いていた。油蝉も日暮の鳴き声も、今が夏なんだと改めて認識させる。そして畠には黒と緑の縞模様をした、あの果物が真ん丸としていて、すごく美味しい出来ばえだった。

そして俺、真田祐樹もその夏を過ごしていた。  
やつと中一の一学期を終え、待ちに待った夏休みを迎えて、充実した夏休みを送つては、いなかつた。

夏休み前の課題。空を題材とした絵を一つ完成させなさい、という美術の教師の言葉を完全に忘れており、見事に絵が完成していかつた。何でも授業中に仕上げないといけなかつたらしいが、俺はそんな事一言も聞いてはいなかつた。

まあ、聞いてない自分が悪いのには変わりないので。  
面倒なので、適当に済ませば良かつたが、この学校の美術の教師は些細な事も見逃さず、少しでも雑にやればやり直し決定。そんでもって居残り決定……という厳しい環境な訳で、結局俺は一学期中に終わらず、夏休みまで毎朝学校に来て絵を仕上げていた。  
毎日朝早く来て、黙々と絵に打ち込む日々。楽しかつたような楽しくなかつたような日々だつた。

ある意味、美術の作品に打ち込んだその日々は、何もせずにだらだらと怠けている日々よりは、十分充実した夏休みだったのかもしない。

しかし、そんな時俺はこう亥いていた。

「空つて言つても……何を描きやいいんだろ」

こんな調子だった。打ち込んだ、とあるけれど、殆ど毎日何を描くかで迷っていた。大体の構図は決まり、絵も順調に描けていた……と思う。

言い張るような事では無いかもしないが、我ながら素晴らしい出来だった。真夏の蒼く透き通った空が、自分にしてはうまい事表現出来ていたと思う。

だが。何か足りないような気がして先が進まなかつた。微かに開いた片隅の空白のスペース。そこに何かが足りないような気がして、ほぼ毎日美術室で一人静かに考えるだけだつた。

「こここの空白のスペース……何か足りないんだよなあ……」

毎日俺はしつこい位、何回もこの言葉を繰り返していた。

そしてある日、俺はいつも通り学校へと向かつた。もう夏休みの俺の日課となりつづがあり、自然と学校へ向かうようになつていた。まあ、小学生の夏休みでいう絵日記くらいのものかな。それぐらい、俺にとっては当然のこととなつていた。

自転車に跨り、まだ涼しさが多少感じられる朝の通学路を、俺は制服で走つていた。

少しばかり急な坂道を越え、スイカ畑が一面に広がる小道。そこを自転車で颯爽と駆け抜けると、俺の通う中学校、河山中学校が見える。いつからこの場所に建つてているのか。既にこの校舎の外観はボロボロで、所々に小さな罅が入つていて。そして校舎の周りには、豊な緑で満ち溢れていた。少し走れば着けるぐらいの位置に、病院や山がある。

その校舎を眺めながら、学校に向かう夏の日々が、俺には限りなく大切で、幸せな日々だった。田舎と呼ばれようが、俺はこの町の全てが大好きだった。

田舎は田舎で良い所がたくさんあるんだぞ。そう、田舎と馬鹿にする都会の奴らに言つてやりたつた。

自転車置き場に自転車を止めるとき、美術道具一式を入れた鞄を毎日提げ、歩き慣れた校内を一人寂しく歩く。校内には俺の足音だけが静かに響いていた。

そして、いつもの様に美術室のノブに手を掛ける。そして毎日同じ雰囲気を漂わす美術室に、足を踏み入れる筈だった。あの、絵の具の匂いや筆の独特の匂いで充満した、あの変わり無い美術室に。しかし、美術室の扉を開けて中に入ると、優しい風が俺の全身を包んだ。

「な、何だ?」「

突然の風に驚きながら、俺は落ち着いて周りを見渡す。壁に貼つてる生徒の作品は、風で軽く靡いている。その風に乗つて、蝉の鳴き声が聞こえる。

そして、その直後、何故風が吹いていたのか分かった。

「ま、窓が開いてる……?」

少し濁つて汚いガラス窓は見事に開いており、白いカーテンが風で靡く。その光景を見ていると、夏なのに妙に涼しく感じる。気分が落ち着くような、そんな感じがする。

いつもと何の変哲も無い美術室。そこに、俺は足を踏み入れる筈だった。

そして、いつものように悩むだけ悩み、殆ど進んで無い状態で、正午には家にいつものように帰る筈だった。

しかし、その日。俺の絵に欠けていた「何か」に気が付くための、小さな小さな一枚片のピースを見つける事が出来たんだ。

物静かな美術室の奥。そこには、一人の少女がいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2075d/>

---

空 くう

2010年12月9日14時14分発行